国際仏教学大学院大学研究紀要
第 22 号（平成 30 年）

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXII, 2018

論の構成からみた『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の関係

―諸法の体系に付随して説かれる教理に注目して―

横　山　　剛

論の構成からみた『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の関係
― 諸法の体系に付随して説かれる教理に注目して ―

横山　剛

はじめに

チベット語訳でのみ現存するチャンドラキールティ（Candrakīrti, 600-650 年頃）の『中観五蘊論』（*Madhyamakapañcaskandhaka*）は、中観派の立場から補足と訂正を加えながら仏教の初学者が無我を理解するための入り口として説一切有部の法体系（いわゆる「五位七十五法」）を解説する小論である。同論は有部の教理に対する中観派の理解を研究する際に貴重な資料となる[1]。筆者はこれまで、書名、著作目的、法体系の性格、梵文の回収など、同論に関する諸々の問題点を考察してきた[2]。本稿では、同論の成立にかかわる最も重要な問題点の一つである同論と塞建陀羅（*Skandhila, 世親と同時代、320-400 あるいは 400-480 年頃）の著した『入阿毘達磨論』（*Abhidharmāvatāra*）の関係について、論の構成という点から考察したい。

瓜生津［1965］と池田［1985］は『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』における心相応行法の構成が類似する点に注目し、『中観五蘊論』の思想的な背景の一つとして『入阿毘達磨論』をあげる。この点については、両研

---

1 『中観五蘊論』に関する基本的な情報や問題点については、拙稿［2015c］の注 1、2 を参照。

2 拙稿［2014c］、［2015a］、［2015c］、［2016a］、［2016b］、［2016c］、［2017a］、［2017d］、［2018］を参照。また、斎藤明教授（国際仏教学大学院大学）が代表を務めるバウッダコーシャプロジェクトにおいて、京都大学の宮崎研究班では、『中観五蘊論』に説かれる七十五法対応語に関して、その定義にもとづく可能な現代語訳を提示し、それを定義的用例集にまとめて、宮崎ほか［2017］として刊行した。同プロジェクトにおける『中観五蘊論』に関する研究としては、BPT［2014］の第四章、拙稿［2015b］、［2017b］、宮崎［2017］も併せて参照されたい。

究の指摘は適切なものであり、筆者もそれに同意する。一方、拙稿［2016b］では、諸法の体系を解説する論書を比較する場合には、諸法の並びだけでなく、論全体の構成や解説の内容についても比較を行う必要があり、異なるレベルから総合的に分析を行う必要があることを指摘した。そして『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の間で顕著な類似が見られるのは、諸法の並びと論の構成の一部までであることを指摘した。また、同研究においては、両論を比較する際には、共通点だけでなく、相違点を分析することで、両論の性格や思想的な立場の違いを読み取ることができることを指摘した（例えば、『入阿毘達磨論』は諸法の実在論証を含むが、『中観五蘊論』はそれを省略し、逆に諸法の相互依存的な関係を理由にその自性を否定するといった点）。

しかし、拙稿［2016b］では、紙幅の都合上、両論全体にわたって論の構成を比較することができなかった。また『中観五蘊論』の論全体の詳しい構成についてはこれまでの研究では明らかにされていない。そこで本稿では『中観五蘊論』全体にわたる論の構成を示し、それを『入阿毘達磨論』の構成と対照させることで、論の構成という点から両論の関係を考察する。さらに、その際には、両論に関するこれまでの研究において注目されることがなかった諸法の体系に付随して説かれる教理に注目して、それらの教理が説かれる位置や文脈の違いから両論に説かれる法体系の性格の差や著者の目的意識の違いを指摘したい。

1.『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の構成の比較

『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の構成を論全体にわたって比較するために、本稿では巻末に両論の構成を対照させた一覧を提出する。ここではまず、両論の構成を比較した際に指摘することができる特筆すべき共通点と相違点について指摘しておきたい。

両論の構成を比較すると、まずは全体の枠組みとして五蘊、十二処、十八界を組み合わせた体系のもとで諸法を説くか、あるいは、八句義（aṣṭa-padārtha）のもとで諸法を説くかという差を指摘することができる。『中観五蘊論』が用いる蘊処界を組み合わせた体系は『倶舎論』などの有部の後

期論書やその影響下で成立した『五蘊論』などの大乗論書における定式化された体系を踏襲したものである[3]。一方、『入阿毘達磨論』が用いる五蘊と三無為を総合した八句義は、一切法の包摂を明確に意識した上で、三無為を前面に押し出すことにより、その実在性を強調した体系であり、一切法の実有を主張する有部の教理が色濃く反映されている[4]。この体系については『倶舎論』以後に成立した『アビダルマディーパ』においても用例が確認される。

次に両論の構成の内容を比較して、主な共通点と相違点を紹介したい。巻末の対照表を見ると、両論の間には諸法の並びだけでなく論の構成という点でも共通点が見られることがわかる。例えば、随眠の解説における「随眠の語義解釈」、「随眠が生じる順番」、「随眠が生じる原因」を見れば両論の構成に密接な関係があることを理解することができる[5]。相違点としては諸門分別の有無をあげることができる。『入阿毘達磨論』は有部アビダルマの伝統にしたがって、随眠、智、得、非得の解説において諸門分別を行う[6]。一方、『中観五蘊論』では、諸法の詳しい分類は省略され、諸

---

3 有部の法体系の展開については、拙稿［2017c］を参照。

4 『入阿毘達磨論』に見られる諸法の実在性を強調する傾向については、拙稿［2016b］pp. 30-34 を参照。

5 『中観五蘊論』:「3.4.2.29.6. 随眠の語義解釈」(D 261a5-6, P 299b3),「3.4.2.29.7. 随眠が生じる順番」(D 261a6-b4, P 299b4-300a2),「3.4.2.29.8. 随眠が生じる原因」(D 261b4, P 300a2-3).『入阿毘達磨論』:「6.2.27.10. 随眠の語義解釈」(D 309b7-310a1, P 402a1-3; T 983c5-11),「6.2.27.12. 随眠が生じる順番」(D 310b3-311a1, P 402b6-403a4; T 983c29-984a14),「6.2.27.13. 随眠が生じる原因」(D 311a1-2, P 403a4-6; T 984a14-18). ここでは『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の論の構成が一致する例として随眠の語義解釈などをあげているが、これらの項目の内容が必ずしもすべて一致するわけではない点に注意が必要である。例えば、随眠の語義解釈において『中観五蘊論』は三通りの解釈を示し、『入阿毘達磨論』は四通りの解釈を示す。

6 『入阿毘達磨論』:「6.2.27.11.5. 九十八随眠の諸門分別」(D 310a6-b3, P 402a8-b6; T 983c20-29),「6.2.38.12. 十智の諸門分別」(D 315a2-7, P 407b7-408a5; T 985c14-23),「6.3.1.7. 得の諸門分別」(D 317a7-b6, P 410b2-411a3; T 986b28-c16),「6.3.1.8. 非得の諸門分別」(D 317b6-318a1, P 411a3-5; T 986c16-24)。

門分別は説かれない。『中観五蘊論』では、十八界の解説の後の結語において、諸法に関する詳細な分類を省略するということが述べられる[7]。十八界が説かれた直後という位置を考えると、この一節は直接的には『倶舎論』第一章の後半で説かれるような十八界による諸門分別を指すと考えられるが、諸法の諸門分別を省略するという傾向は『中観五蘊論』全体を通じて見られる特徴といえよう。

このように論の構成という点から『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』を比較した場合、共通点ばかりでなく相違点も数多く見いだされる。そのような相違点の中でも特に目を引くものとして、諸法の体系の直接的な構成要素ではないが、それに付随して説かれる器世間などの解説がある。両論が法体系の解説を趣旨とする論書であるために、これまでの研究においてはこれらの教説が注目されることはなかった。したがって、ここからは諸法の体系に付随して説かれる教理に注目して、両論の構成を比較してみたい。

2.『入阿毘達磨論』において諸法の体系に付随して説かれる教理

まずは『入阿毘達磨論』において法体系に付随して説かれる教理について確認したい。先に述べたように同論では八句義を枠組みとして有部の法体系が説かれるが、その際には諸法の体系だけでなく、器世間の構造（三界など）、修道論（四向四果など）、因果論（六因など）という法体系と密接に関係する有部の教理が解説される。以下に同論の構成の概要を示し、その中で法体系に付随して説かれる教理を太字で示す。

1. 序偈、序文 ..... D 302b1-4, P 393a3-8; T 980b24-c7.
2. 八句義の総説 ..... D 302b4-5, P 393a8-b1; T 980c8-9.
3. 色句義 ..... D 302b5-305a1, P 393b1-396a2; T 980c9-981c7.
4. 受句義 ..... D 305a1-7, P 396a2-b2; T 981c8-19.

---

7 MPSk: D 266b5, P 305b2-3.『中観五蘊論』の結語におけるこの一節については、拙稿［2016b］pp. 37-38 の注 8, 9 を参照。

5. 想句義 ..... D 305a7-b2, P 396b2-6; T 981c20-26.
6. 行句義
 6.1. 行句義の総説 ..... D 305b2-306a1, P 396b6-397a6; T 981c27-982a7.
 6.2. 心相応行
  6.2.1-21. 大地法と大善地法に相当する諸法.....
  D 306a1-307a2, P 397a6-398b4; T 982a8-b15.
  6.2.22-24. 善根、不善根、無記根.....
  D 307a2-b4, P 398b4-399b1; T 982b25-c20.
  6.2.25-36. 結ないし蓋の諸煩悩 .....
  D 307b4-313a6, P 399b1-405b7, T 982c21-985a18.
  6.2.37. 界、趣、生、地（器世間の構造）.....
  D 313a6-314a1, P 405b7-406b3, T 985a19-b11.
  6.2.38-39. 智、忍..... D 314a1-315b6, P 406b3-408b6, T 985b12-986a7.
  6.2.40. 四向四果（修道論）... D 315b6-316b3, P 408b6-409b4, T 986a7-27.
 6.3. 心不相応行..... D 316b3-320b4, P 409b4-414a3, T 986a28-988a12.
7. 識句義 ..... D 320b4-7, P 414a3-8, T 988a12-20.
8. 六因、五果、四縁（因果論）.....
D 320b7-321b6, P 414a8-415b1, T 988a21-b24.
9. 虚空句義..... D 321b6-322a1, P 415b1-5, T 988b26-c3.
10. 択滅句義 ..... D 322a1-323a2, P 415b8-416b6, T 988c4-989a3.
11. 非択滅句義..... D 323a2-5, P 416b6-417a4, T 989a4-13.
12. 結語 ..... D 323a5-7, P 417a4-8, T 989a13-18.

『入阿毘達磨論』において法体系に付随して説かれるこれらの教理が挿入される文脈は次のように説明することができる。器世間の構造は諸煩悩の解説の直後に説かれるが、これは諸煩悩の解説における欲界繋などの分類を説明するために三界について解説するという文脈によるものである。そして、三界から五趣、四生、十一地へと解説が敷衍される。四向四果は智と忍の直後に説かれるが、これは諸煩悩の後にそれを断じる智と忍が解説され、さらに煩悩を断じる過程として四向四果が説かれるという文脈に

よるものである。そして、四向四果から随信行などの六種のプドガラへと解説が敷衍される。六因、五果、四縁は識句義の直後に説かれるが、これは識句義をもって五蘊、すなわち、有為法の解説が終わり、その後に有為法の因果律を解説するという文脈によるものである。

このように『入阿毘達磨論』において法体系に付随して説かれる教理が置かれる位置やそれらの教理を敷衍して説く傾向をみると、法体系の解説を軸としながらもそれに密接に関係する教理についても網羅的に解説を行い、有部の教理を総合的に解説しようとする著者の意図を読み取ることができる。「入阿毘達磨論」という書名が表す通り、同論は初学者に向けて有部の教理を略説する綱要書であるが、以上で指摘した著作姿勢は同論の趣旨に沿うものであるといえよう。

3.『中観五蘊論』において諸法の体系に付随して説かれる教理

次に法体系に付随して説かれるこれらの教理が『中観五蘊論』においてどのような位置で説かれているのかを確認し、『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の間に見られる差異について検討する。以下に『中観五蘊論』の構成の概要を示し、法体系に付随して説かれる教理を太字で示す。

1. 序偈……D 239b1-2, P 273b7-8.
2. 五蘊、十二処、十八界の総説……D 239b2-6, P 273b8-274a5.
3. 五蘊
   - 3.1. 色蘊……D 239b6-243b3, P 274a5-278b5.
   - 3.2. 受蘊……D 243b3-244b3, P 278b5-279b8.
   - 3.3. 想蘊……D 244b3-245a3, P 279b8-280b2.
   - 3.4. 行蘊
     - 3.4.1. 行蘊の総説……D 245a3-b5, P 280b2-281a6.
     - 3.4.2. 心相応行
       - 3.4.2.1-23. 思ないし解脱……D 245b5-256a3, P 281a6-293b6.
       - 3.4.2.24-26. 善根、不善根、無記根……D 256a3-b4, P 293b6-294b1.
       - 3.4.2.27. 結……D 256b4-259a3, P 294b1-297a5.

3.4.2.28. 縛 ..... D 259a3-4, P 297a5-7.
3.4.2.29. 随眠
3.4.2.29.1. 随眠の総説 ..... D 259a4-6, P 297a7-b1.
3.4.2.29.2. 三界の解説 ..... D 259a6-b6, P 297b2-298a2.
3.4.2.29.3. 五部の解説 ..... D 259b6-260a2, P 298a2-5.
3.4.2.29.4. 九十八随眠 ..... D 260a2-261a1, P 298a5-299a5.
3.4.2.29.5. 四向四果 ..... D 261a1-5, P 299a5-b2.
3.4.2.29.6-8. 随眠の語義解釈など ..... D 261a5-261b4, P 299b3-300a3.
3.4.2.30. 随煩悩 ..... D 261b5-262a5, P 300a3-b5.
3.4.2.31. 纏 ..... D 262a5-263a1, P 300b5-301a8.
3.4.2.32-35. 漏、暴流、軛、取 ..... D 263a1-b4, P 301a8-302a5.
3.4.2.36. 漏ないし取の語義解釈 ..... D 263b4-6, P 302a5-8.
3.4.2.37-38. 繋、蓋 ..... D 263b6-264a3, P 302a8-b4.
3.4.2.39-40. 智、忍 ..... D 264a3-265a5, P 302b5-303b8.
3.4.3. 心不相応行 ..... D 265a5-b7, P 303b8-304b4.
3.5. 識蘊 ..... D 265b7-266a7, P 304b5-305a4.
4. 十二処 ..... D 266a7-b4, P 305a4-b1.
5. 十八界 ..... D 266b4-5, P 305b1-2.
6. 結語と結偈 ..... D 266b5-6, P 305b2-3.

まず、器世間の構造については、『入阿毘達磨論』では煩悩法の直後に説かれるが、『中観五蘊論』では随眠の解説において十随眠の九十八随眠への展開を説く中で見苦所断などの五部と併せて三界が解説される。しかし、五趣、四生、十一地は説かれない。この点は『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の性格の差を反映している。『入阿毘達磨論』は五趣などを含めて器世間の構造に関する教理を網羅的に解説しようとするが、『中観五蘊論』は器世間の解説を随眠の解説に組み込み、九十八随眠の解説に必要な三界のみを解説していると考えられる。

次に修道論については、『入阿毘達磨論』では智と忍の直後に説かれるが、『中観五蘊論』では、三界の解説と同じく、随眠の解説において四向

四果が解説される。そして、六種のプドガラは説かれない。この点については、『入阿毘達磨論』は智と忍という煩悩を断じる際に主体となる法を説き終えた後に修道論についての独立した解説を設けているが、『中観五蘊論』は随眠の解説に四向四果の解説を組み込んだ上で有部の修道論の最も基本的な要素である四向四果のみを説いたと考えられる。

このように器世間と修道論が説かれる場所の違いに注目すれば、『入阿毘達磨論』は論書の趣旨である諸法の体系の途中に世界観や修道論に関する網羅的な解説を挿入して有部の教理を包括的に解説しようとしているが、それに対して『中観五蘊論』は世界観や修道論に関する必要最低限の教理を随眠の解説に組み込むことで論全体を法体系の解説に絞り込んでいるというように、両論における著作姿勢の差を指摘することができる[8]。

最後に因果論に関する両論の相違点を検討してみたい。先に述べたように『入阿毘達磨論』は有為法である五蘊の解説が終わった直後にそれらの有為法の因果律として六因、五果、四縁を説く。一方、『中観五蘊論』は六因などの解説を行わない。『中観五蘊論』が因果論の解説を欠くことについては、二つの理由が考えられる。まずは、先に指摘した論全体の解説を法体系に絞り込もうとする『中観五蘊論』の性格である。同論は諸法の体系のみを解説して、その因果律の解説については省略したと考えることができる。次に、相互依存的な関係を理由に諸法の自性を否定しようとする『中観五蘊論』の思想的な傾向である[9]。同論は、本質的には中観派の

8　本稿では論の構成という点から『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の比較を行っているが、注 3 において随眠の語義解釈などについて指摘したのと同様に、器世間と修道論の解説についても、解説の内容が完全に一致するわけではないという点に注意が必要である。例えば、器世間については、『中観五蘊論』は色界に十七天を数えるが、『入阿毘達磨論』は十六天を数える（拙稿［2017d］の「2.『中観五蘊論』に説かれる有部の教説について」ならびに「3. 色界の天の数について」を参照）。また、修道論に関しては、『入阿毘達磨論』は散文で説くのに対して、『中観五蘊論』は韻文で説く。

9『中観五蘊論』における諸法の実在論証の省略については、注 4 においても紹介した拙稿［2016b］pp. 30-34 を参照。同論における相互依存性にもとづく諸法の自性の否定については、拙稿［2015c］［2016a］を参照。

立場に立つために、諸法の実在性を前提とする六因、五果、四縁の解説を行わなかったという可能性も指摘することができる。

おわりに

本稿において得られた結論を整理すれば、以下の通りである。論の構成という点から『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』を比較すると、諸法の並びばかりでなく、論の構成においても両論に共通点が見られることがわかる。しかし、この場合、共通点ばかりでなく、相違点にも目を向ける必要がある。論の構成における相違点からは、同じ有部の法体系を解説することを趣旨とする論書であっても、両論の間に性格の違いがあることが読み取れる。

特に器世間、修道論、因果論という法体系に付随して説かれる教理に注目すれば、『入阿毘達磨論』が諸法の体系を軸としながらもそれに付随する教理についても網羅的に解説し、有部の教理を包括的に解説しようとするのに対して、『中観五蘊論』は解説をあくまでも法体系に絞り込み、法体系に付随する教理については必要最低限の内容を法体系の中に組み込んでいることがわかる。両論における以上の著作姿勢は「入阿毘達磨論」（＝アビダルマの入門書）と「中観五蘊論」（＝中観派の視点から五蘊を説く論）という書名にも反映されている。

さて、本稿では論の構成という点から『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の関係を考察したが、両論の関係を考察する際には、文章レベルでの比較も必要であることは言うまでもない。この点から両論の関係を見ると並行箇所はあくまでも限定的であり、『入阿毘達磨論』以外の有部論書から教説を借用していたり、『入阿毘達磨論』と異なる伝統にもとづく解説がされている箇所が数多く見られる[10]。今後はこのような一見すると『入阿毘達磨論』からの借用に見えるが、文章レベルで見ると他の有部論書の

[10]『中観五蘊論』の背後に存在する『入阿毘達磨論』以外の論書としては、瓜生津［1978］は『倶舎論』をあげる。また拙稿［2018］では『中観五蘊論』と龍樹の『宝行王正論』の関係を指摘した。

教理を踏襲している可能性が考えられる教説に注目して、特に『倶舎論』以前の有部論書と『中観五蘊論』の関係を考察することを予定している。

略号一覧 Abbreviations

AA	*Abhidharmāvatāra*
AY	Akahane and Yokoyama
BPT	Bauddhakośa Project Team
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
MMA	*Munimatālaṃkāra*
MPSk	*Madhyamakapañcaskandhaka*
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
T	*Taishō Shinshū Daizōkyō* 『大正新脩大蔵経』

参考文献

一次文献

Abhidharmāvatāra

(Tib.) D (4097) *ñu* 302a7–323a7, P [119](5599) *thu* 393a3–417a8.

(Tib. ed.) Dhammajoti [2008] pp. 208–275.

(Ch.) T, vol. 28 (1554) 980b20–989a19, translated by Xuanzang 玄奘.

(Eng.) Dhammajoti [2008] pp. 71–208.

(Fr.) Velthem [1977] pp. 1–79.

(Jpn.) 櫻部 [1997]

Madhyamakapañcaskandhaka

(Tib.) C *ya* 236a7–263a7, D (3866) *ya* 239b1–266b7, G (3266) *ya* 326a–365b3, N (3258) *ya* 264a6–295a3, P [99](5267) *ya* 273b6–305b5.

(Tib. ed.) Lindtner [1979].

Munimatālaṃkāra

(Skt.) Section of Sarvadharma: 李・加納 [2015]

（Tib.）D（3903）*a* 73b1–293a7, P［101］(5299）*ha* 71b3–398b3.
（Tib. ed.）Section of Sarvadharma: Akahane and Yokoyama［2014］, Akahane and Yokoyama［2015］.
（Jpn.）Section of Sarvadharma: 李ほか［2015］.

研究一覧

Akahane, Ritsu and Yokoyama Takeshi 赤羽律、横山剛
［2014］"The Sarvadharma Section of the *Munimatālaṃkāra*, Critical Tibetan Text, Part I: with Special Reference to Candrakīrti's *Madhyamakapañcaskandhaka*,"『インド学チベット学研究』18, pp. 14–49.
［2015］"The Sarvadharma Section of the *Munimatālaṃkāra*, Critical Tibetan Text, Part II: with Special Reference to Candrakīrti's *Madhyamakapañcaskandhaka*,"『インド学チベット学研究』19, pp. 97–137.

Bauddhakośa Project Team バウッダコーシャ・プロジェクトチーム
［2014］「śraddhā/saddhā の訳語をめぐって」,『仏教文化研究論集』17, pp. 3–64.

Dhammajoti, Kuala Lumpur 法光
［2008］*Entrance into the Supreme Doctrine, Skandhila's Abhidharmāvatāra*, The University of Hong Kong, 2nd ed., Hong Kong.（1st ed., Colombo, 1998）

Ikeda, Rentarō 池田練太郎
［1985］「Candrakīrti『五蘊論』における諸問題」,『駒澤大學佛教學部論集』16, pp. 588–566.

Li, Xuezhu and Kano, Kazuo 李学竹、加納和雄
［2015］「梵文校訂『牟尼意趣荘厳』第一章―『中観五蘊論』にもとづく一切法の解説（fol. 48r4–58v1）―」,『密教文化』234, pp. 7–44.

Li, Xuezhu *et al.* 李学竹ほか
［2015］「梵文和訳『牟尼意趣荘厳』―一切法解説前半部―」，『インド学チベット学研究』19, pp. 138–157.
［2016］「梵文和訳『牟尼意趣荘厳』―一切法解説後半部―」，『インド学チベット学研究』20, pp. 53–75.

Lindtner, Christian
［1979］“Candrakīrti's Pañcaskandhaprakaraṇa, I. Tibetan Text,” *Acta Orientalia* XL, pp. 87–145.

Miyazaki, Izumi 宮崎泉
［2017］「『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語』の出版を終えて」，*Bauddhakośa Newsletter* 6, pp. 9–12.

Miyazaki, Izumi *et al.* 宮崎泉ほか
［2017］『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語―仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集―バウッダコーシャ IV』，山喜房佛書林，東京。

Sakurabe, Hajime 櫻部建
［1997］「附篇『入阿毘達磨論』（チベット文よりの和訳）」，『増補版　佛教語の研究』，文栄堂書店，京都，pp. 184–241.（初出：「入阿毘達磨論の研究」，『大谷大学研究年報』18 (1965), pp. 163–227，再録：「附篇『入阿毘達磨論』（チベット文よりの和訳）」，『佛教語の研究』，文栄堂書店，京都，1975, pp. 121–177，上述の 1997 年の論文は補訂再録版）

Takeda, Hiromichi 武田宏道
［2013］「『入阿毘達磨論』に説かれる四有為相」，『佛教學研究』69, pp. 1–25.

Uryūzu, Ryūshin 瓜生津隆真
[1965]「中観仏教におけるボサツ道の展開―チャンドラキールティの中観学説への一視点」,『鈴木学術財団年報』1, pp. 63–77.（改訂版：「中観仏教における菩薩道の展開―『入中論』を中心として―」,『全訳　チャンドラキールティ　入中論』, 起心書房, 千葉, 2012, pp. 1–31）
[1978]「中観学派におけるアビダルマ―月称造『五蘊論』管見」,『國譯一切經印度撰述部月報　三藏集』第三輯, 大東出版社, 東京, pp. 185–192.（初出：『國譯一切經印度撰述部月報　三藏』116（毘曇部第二十四巻）, 大東出版社, 東京, 1976）

Velthem, Marcel van
[1977] *Le traité de la descente dans la profonde loi* (*Abhidharmāvatāraśāstra*) *de l'Arhat Skandhila*, Publications de l'Institut Orientaliste de Louvain 16, Université catholique de Louvain, Institute orientaliste, Louvain-la-Neuve.

Yokoyama, Takeshi 横山剛
[2013a] "The Real Existence of *Pratisaṃkhyānirodha*: The *Mānuṣyakasūtra* as Scriptural Evidence in the *Abhidharmāvatāra*,"『印度學佛教學研究』61-3, pp. 110–114.
[2013b]「塞建陀羅造『入阿毘達磨論』成立考―『倶舎論』との先後関係をめぐって―」,『佛教史學研究』56-1, pp. 1–21.
[2014a] "The Chronological Order of the *Abhidharmāvatāra* and the *Abhidharmakośabhāṣya*: Reexamining the Evidence in Puguang's *Jushelun ji*,"『印度學佛教學研究』62-3, pp. 148–152.
[2014b]「『入阿毘達磨論』の原題に関する考察―蔵訳仏典が伝える書名中の "rab tu byed pa"（prakaraṇa）の意味をめぐって―」,『日本西藏學會々報』60, pp. 1–14.
[2014c]「『牟尼意趣荘厳』（*Munimatālaṃkāra*）における一切法の解説―月称造『中観五蘊論』との関連をめぐって―」,『密教文化』233, pp. 51–

77.
［2015a］“A Reconstruction of the Sanskrit Title of Candrakīrti’s *Phuṅ po lṅa’i rab tu byed pa*: with Special Attention to the Term “*rab tu byed pa*,” 『印度學佛教學研究』63-3, pp. 208–212.
［2015b］「中観派における術語の定義的用例と現代語訳の検討―『中観五蘊論』に基づく研究成果の公開に向けて―」，*Bauddhakośa Newsletter* 4, pp. 3–9.（公開 URL: http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/pdf/news_letter_004.pdf）
［2015c］「『中観五蘊論』における諸法解説の性格―無我説との関係をめぐって―」，『密教文化』235, pp. 89–114.
［2016a］“An Analysis of the Textual Purpose of the *Madhyamakapañcaskandhaka*: With a Focus on its Role as a Primer on Abhidharma Categories for Buddhist Beginners,”『印度學佛教學研究』64-3, pp. 164–168.
［2016b］「『中観五蘊論』の思想的背景について―『五蘊論』ならびに『入阿毘達磨論』との関係についての再考察―」，『真宗文化』25, pp. 23–42.
［2016c］「『中観五蘊論』の著者について―月称部分著作説の再考察―」，『密教文化』237, pp. 71–100.
［2017a］“An Analysis of the Conditioned Forces Dissociated from Thought in the *Madhyamakapañcaskandhaka*,”『印度學佛教學研究』65-3, pp. 177–182.
［2017b］「中観派における prajñā の定義的用例：『中観五蘊論』に基づく訳語の検討」，『仏教文化研究論集』18・19 合併号，pp. 59–74.
［2017c］「アビダルマの法体系の基礎をなす仏教的な人間理解―存在の分析における五蘊の意義をめぐって―」，『日本佛教學會年報』82, pp. 62–87.
［2017d］「『中観五蘊論』に説かれる有部説の帰属をめぐって」，『密教文化』239，印刷中．
［2018］“The Relationship between the *Madhyamakapañcaskandhaka* and the *Ratnāvalī*: *With a Focus on the Parallel Passages in the Definitions of the Defiled Elements*,”『印度學佛教學研究』66-3, pp. 135–140.

資料　『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の構成の比較

以下に提出するのは、左側に『中観五蘊論』の構成を示し、右側に『入阿毘達磨論』の構成を示して、両論の構成を対照させた一覧である。

一覧の各項目においてはその該当箇所を示した。『中観五蘊論』については、チベット語訳二版（デルゲ版、北京版）の該当箇所（葉数、裏表、行数）と『牟尼意趣荘厳』の一切法解説における対応箇所を示した（『中観五蘊論』と『牟尼意趣荘厳』の関係については、拙稿［2014c］を参照）。『入阿毘達磨論』については、チベット語訳二版（デルゲ版、北京版）と漢訳の該当箇所を示した。

いずれかの論書に対応する解説がない場合には、それを「――――」によって示した。対応する解説があるが説かれる場所が異なる場合には、参照すべき対象箇所を矢印付きで示した。当該箇所に関係する研究がある場合には、その情報を丸括弧付きで示した。また、本稿で考察の対象となる諸法の体系に付随して説かれる教理については太字で示した。

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
1. 序偈 D 239b1-2, P 273b7-8.（Lindtner［1979］95.4-7, 拙稿［2015c］90-91,［2016a］165）	1. 序偈，序文 D 302b1-4, P 393a3-8; T 980b24-c7.（櫻部［1997］191.7-13, Dhammajoti［2008］71.1-30, 209.17-210.11, Velthem［1977］1.1-25）
2. 五蘊，十二処，十八界の総説 D 239b2-6, P 273b8-274a5. Cf. MMA: 12.13.（Lindtner［1979］95.8-24）	2. 八句義の総説 D 302b4-5, P 393a8-b1; T 980c8-9.（櫻部［1997］192.26-27, Dhammajoti［2008］72.1-7, 211.1-6, Velthem［1977］2.2-11）
3. 五蘊 3.1. 色蘊 3.1.1. 色蘊の総説 D 239b6-7, P 274a5-7. Cf. MMA: 12.	3. 色句義 3.1. 色句義の総説 D 302b5-6, P 393b1-2; T 980c9-10.（櫻

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
15-13.2.（Lindtner［1979］95.25-3）	部［1997］193.1-2, Dhammajoti［2008］73.1-2, 211.7-9, Velthem［1977］2.12-14）
3.1.2. 大種（Lindtner［1979］96.4-97.6）	3.2. 大種（櫻部［1997］193.3-12, Dhammajoti［2008］73.4-19, 211.10-22, Velthem［1977］2.15-3.9）
3.1.2.1. 大種の総説 D 239b7-240a2, P 274a7-b1. Cf. MMA: 13.2-4.	3.2.1. 大種の総説 D 302b6, P 393b2-3; T 980c10-11.
3.1.2.2. 大種と所造色の関係 D 240a2-3, P 274b1-3. Cf. MMA: 13.4-10.	→「3.3.2. 所造色と大種の関係」
3.1.2.3. 大種の自性と作用 D 240a3-5, P 274b3-6. Cf. MMA: 14.10-13.	3.2.2. 大種の自性と作用 D 302b6-7, P 393b3; T 980c12-13.
3.1.2.4. 大種の相互依存 D 240a5-7, P 274b6-8. Cf. MMA: 14.14-18.（拙稿［2016a］166-167）	――――――― ――――――― ―――――――
3.1.2.5. 大種の語義，大種と虚空の違い D 240a7-b1, P 274b8-275a2. Cf. MMA: 15.1-2.	3.2.3. 大種の語義，大種と虚空の違い D 302b7, P 393b3-4; T 980c13-15.
――――――― ―――――――	3.2.4. 大種の数 D 302b7-303a1, P 393b4; T 980c15-16.
3.1.3. 所造色 ――――――― ――――――― ――――――― ――――――― ―――――――	3.3. 所造色 3.3.1. 所造色の総説 D 303a1, P 393b4-5; T 980c16-18.（櫻部［1997］193.19-20, Dhammajoti［2008］73.20-24, 211.23-28, Velthem［1977］3.10-14）
→「3.1.2.2. 大種と所造色の関係」	3.3.2. 所造色と大種の関係 D 303a1-2, P 393b5-6; T 980c18-19.（櫻部［1997］193.20-21, Dhammajoti［2008］73.24-26, Velthem［1977］3.14-16）

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
3.1.3.1. 五根（Lindtner［1979］97.7–98.23）	3.3.3. 五根（櫻部［1997］193.22–25, Dhammajoti［2008］73.27–30, 211.29–33, Velthem［1977］3.17–21）
3.1.3.1.1. 眼根 D 240b1–241a2, P 275a2–b4. Cf. MMA: 15.5–6.（宮崎ほか［2017］2–7）	3.3.3.1. 眼根 D 303a2, P 393b6; T 980c19–20.
3.1.3.1.2. 眼根以外の四根と男女根 D 241a2–4, P 275b4–7. Cf. MMA: 15.7–10.（宮崎ほか［2017］8–19）	3.3.3.2. 眼根以外の四根 D 303a2, P 393b6; T 980c20.
3.1.3.1.3. 根の語義 D 241a4–6, P 275b7–276a2. Cf. MMA: 15.9–10.	――――――― ――――――― ―――――――
3.1.3.2. 五境（Lindtner［1979］98.24–100.32）	3.3.4. 五境（櫻部［1997］193.26–195.15, Dhammajoti［2008］73.31–75.28, 212.1–213.36, Velthem［1977］3.22–7.3）
3.1.3.2.1. 五境の総説 D 241a6–7, P 276a2–4.	――――――― ―――――――
3.1.3.2.2. 色 D 241a7–b4, P 276a4–b1. Cf. MMA: 16.2–6.（宮崎ほか［2017］20–25）	3.3.4.1. 色 D 303a2–6, P 393b6–394a3; T 980c20–28.
3.1.3.2.3. 声 D 241b4–242a3, P 276b1–277a1. Cf. MMA: 16.6–8.（宮崎ほか［2017］26–31）	3.3.4.2. 声 D 303a6–b2, P 394a3–7; T 980c28–981a8.
3.1.3.2.4. 香 D 242a3–4, P 277a1–2. Cf. MMA: 16.8.（宮崎ほか［2017］32–35）	3.3.4.3. 香 D 303b2–3, P 394a8–b1; T 981a8–12.
3.1.3.2.5. 味 D 242a4, P 277a2–3. Cf. MMA: 16.8–9.（宮崎ほか［2017］36–38）	3.3.4.4. 味 D 303b3–4, P 394b1–2; T 981a12–14.
3.1.3.2.6. 所触 D 242a4–b1, P 277a3–8. Cf. MMA: 16.9–15.（宮崎ほか［2017］39–44）	3.3.4.5. 所触の一部 D 303b4–304a1, P 394b2–6; T 981a14–21.
3.1.3.3. 五根五境と六識の関係	―――――――

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
D 242b1-3, P 277a8-b3. Cf. MMA: 16. 16-18.	――――――――
3.1.3.4. 無表 Cf. MMA: 16.20.（Lindtner［1979］100.33-102.17, 宮崎ほか［2017］45-55）	――――――――
3.1.3.4.1. 無表の定義	3.3.5. 無表（櫻部［1997］195.16-197.7, Dhammajoti［2008］75.29-78.14, 214. 1-216.17, Velthem［1977］7.3-10.14）
D 242b3-4, P 277b3-5. Cf. MMA: 40. 17-41.2.	3.3.5.1. 無表の定義
→「3.1.3.4.4. 表と無表」	3.3.5.1.1. 表と無表
――――――――	D 304a1-2, P 394b6-8; T 981a21-24.
――――――――	3.3.5.1.2. 無表の特徴
――――――――	D 304a2-3, P 394b8-395a1; T 981a24-27.
（拙稿［2016b］31-34）	3.3.5.1.3. 無表の実在論証
	D 304a3-4, P 395a1-2; T 981a27-29.
3.1.3.4.2. 律儀，不律儀，非律儀非不律儀	3.3.5.2. 律儀，不律儀，非律儀非不律儀
D 242b4-243a2, P 277b5-278a3. Cf. MMA: 41.2-3.	D 304a4-b1, P 395a2-8; T 981a29-b14.
3.1.3.4.3. 律儀などの獲得と放棄	3.3.5.3. 律儀などの獲得と放棄
D 243a2-7, P 278a3-b1. Cf. MMA: 41. 3-5.	D 304b1-5, P 395a8-b1; T 981b14-27.
3.1.3.4.4. 表と無表	→「3.3.5.1.1. 表と無表」
D 243a7-b3, P 278b1-5. Cf. MMA: 41. 6-15.	
――――――――	3.3.5.4. 無表五根と意識の関係
――――――――	D 304b5, P 395b6; T 981b27-28.
――――――――	3.4. 色句義の結び
――――――――	D 304b5-305a1, P 395b6-396a2; T 981b28-c7.（櫻部［1997］199.13-26, Dhammajoti［2008］78.15-33, 216.18-36, Velthem［1977］10.17-11.15）
――――――――	
――――――――	
3.2. 受蘊（Lindtner［1979］102.18-104.10, 宮崎ほか［2017］62-73）	4. 受句義（櫻部［1997］200.6-201.2, Dhammajoti［2008］79.1-79, 217.1-31, Velthem［1977］11.16-12.26）

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
3.2.1. 受の定義 D 243b3, P 278b5-6. Cf. MMA: 17.6-7.	4.1. 受の定義 D 305a1-3, P 396a2-5; T 981c8-11.
3.2.2. 心と心所の関係 D 243b3-244a1, P 278b6-279a4. Cf. MMA: 17.9-15.	――――――― ――――――― ―――――――
→「3.2.6. 六受」	4.2. 六受 D 305a3-4, P 396a5-6; T 981c12-13.
3.2.3. 二受 D 244a1-2, P 279a4-5. Cf. MMA: 18.1.	4.3. 二受 D 305a4, P 396a6; T 981c13-14.
3.2.4. 三受 D 244a2-4, P 279a5-b1. Cf. MMA: 18.1-2.	→「4.1. 受の定義」
3.2.5. 五受 D 244a4-b2, P 279b1-7. Cf. MMA: 18.2-9.	4.4. 五受 D 305a4-7, P 396a6-b2; T 981c14-19.
3.2.6. 六受 D 244b2-3, P 279b7-8. Cf. MMA: 18.9-10.	→「4.2. 六受」
3.3. 想蘊（Lindtner［1979］104.11-105.9, 宮崎ほか［2017］74-81）	5. 想句義（櫻部［1997］201.5-14, Dhammajoti［2008］80.1-21, 218.1-18, Velthem［1977］13.1-21）
3.3.1. 想の定義 D 244b3-5, P 279b8-280a4. Cf. MMA: 18.12-17.	5.1. 想の定義 D 305a7-b1, P 396b2-4; T 981c20-23.
3.3.2. 想と識の違い D 244b5-7, P 280a4-6.	――――――― ―――――――
3.3.3. 想と言語の関係 D 244b7-245a2, P 280a6-b1. Cf. MMA: 18.18-19.	――――――― ――――――― ―――――――
3.3.4. 六想 D 245a2-3, P 280b1-2. Cf. MMA: 19.9-10.	5.2. 六想 D 305b1, P 396b4; T 981c23.
3.3.5. 三想 D 245a3, P 280b2.	5.3. 三想 D 305b1-2, P 396b4-6; T 981c23-26.
3.4. 行蘊	6. 行句義

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
3.4.1. 行蘊の総説（Lindtner［1979］105.10–106.9）	6.1. 行句義の総説（櫻部［1997］201.24–202.7, Dhammajoti［2008］81.1–82.4, 219.1–30, Velthem［1977］13.22–15.2）
3.4.1.1. 心相応行と心不相応行 D 245a3–6, P 280b2–6. Cf. MMA: 19.13–16.	6.1.1. 心相応行と心不相応行 D 305b2–3, P 396b6; T 981c27.
3.4.1.2. 心相応行の総説 D 245a6–b2, P 280b6–281a2. Cf. MMA: 20.2–8.	6.1.2. 心相応行の総説 D 305b3–6, P 396b6–397a3; T 981c27–982a3.
3.4.1.3. 心不相応行の総説 D 245b2–5, P 281a2–6. Cf. MMA: 34.2–5.	6.1.3. 心不相応行の総説 D 305b6–7, P 397a3–5; T 982a3–6.
――――――― ――――――― ―――――――	6.1.4. 行蘊が複数法からなることの教証 D 305b7–306a1, P 397a5–6; T 982a6–7.
3.4.2. 心相応行	6.2. 心相応行
3.4.2.1. 思 D 245b5–7, P 281a6–b1. Cf. MMA: 20.10–12.（Lindtner［1979］106.12–20, 宮崎ほか［2017］82–85）	6.2.1. 思 D 306a1, P 397a6–7; T 982a8–9.（櫻部［1997］202.15–17, Dhammajoti［2008］82.5–11, 220.1–7, Velthem［1977］15.3–7）
3.4.2.2. 触 D 245b7–246a4, P 281b1–6. Cf. MMA: 20.14–21.（Lindtner［1979］106.21–107.4, 宮崎ほか［2017］91–95）	6.2.2. 触 D 306a1–2, P 397a7–8; T 982a9–11.（櫻部［1997］202.18–20, Dhammajoti［2008］82.12–19, 220.8–12, Velthem［1977］15.8–13）
3.4.2.3. 作意 D 246a4–b4, P 281b6–282b1. Cf. MMA: 21.7–9.（Lindtner［1979］107.5–35, 宮崎ほか［2017］103–106）	6.2.3. 作意[1)] D 306a2–4, P 397a8–b2; T 982a12–16.（櫻部［1997］202.23–203.1, Dhammajoti［2008］82.23–33, 220.13–21, Velthem［1977］15.16–27）
3.4.2.4. 欲 D 246b4–247a7, P 282b1–283a7. Cf. MMA: 21.11–13.（Lindtner［1979］108.1–109.9, 宮崎ほか［2017］86–90）	6.2.4. 欲[1)] D 306a4, P 397b2–3; T 982a11–12.（櫻部［1997］203.7–8, Dhammajoti［2008］82.20–22, 220.22–24, Velthem［1977］

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
	15.14–15)
3.4.2.5. 勝解 D 247a7–b2, P 283a7–b1. Cf. MMA: 21.15–17. (Lindtner [1979] 109.10–17, 宮崎ほか [2017] 107–110)	6.2.5. 勝解[1)] D 306a4–5, P 397b3; T 982a16–18. (櫻部 [1997] 203.14–15, Dhammajoti [2008] 83.1–3, 220.25–27, Velthem [1977] 15.28–30)
3.4.2.6. 信 D 247b2–7, P 283b1–8. Cf. MMA: 22.3–7. (Lindtner [1979] 109.18–110.4, BPT [2014] 37–44, 宮崎ほか [2017] 114–118)	6.2.6. 信[1)] D 306a5–7, P 397b3–6; T 982a28–b4. (櫻部 [1997] 203.20–27, Dhammajoti [2008] 83.29–84.6, 220.28–221.4, Velthem [1977] 16.26–17.9)
3.4.2.7. 精進 D 247b7, P 283b8–284a1. Cf. MMA: 22.7. (Lindtner [1979] 110.5–8, 宮崎ほか [2017] 119–121)	6.2.7. 精進[1)] D 306a7, P 397b6–7; T 982b4–6. (櫻部 [1997] 204.5–7, Dhammajoti [2008] 84.7–11, 221.5–4, Velthem [1977] 17.10–14)
3.4.2.8. 念 D 247b7–248a1, P 284a1. Cf. MMA: 22.7–9. (Lindtner [1979] 110.9–10, 宮崎ほか [2017] 100–102)	6.2.8. 念[1)] D 306a7–b1, P 397b7–8; T 982a18–19. (櫻部 [1997] 204.8–9, Dhammajoti [2008] 83.4–87, 221.9–11, Velthem [1977] 16.1–3)
3.4.2.9. 定 D 248a1–2, P 284a1–2. Cf. MMA: 22.9. (Lindtner [1979] 110.11–14, 宮崎ほか [2017] 111–113)	6.2.9. 定[1)] D 306b1–2, P 397b8–398a1; T 982a19–21. (櫻部 [1997] 204.11–15, Dhammajoti [2008] 83.8–12, 221.12–17, Velthem [1977] 16.4–9)
3.4.2.10. 慧 Cf. MMA: 22.9–13. (Lindtner [1979] 110.15–121.10)	6.2.10. 慧[1)] D 306b2–3, P 398a1–2; T 982a22–24. (櫻部 [1997] 204.20–23, Dhammajoti [2008] 83.13–18, 221.18–23, Velthem [1977] 16.10–15)
3.4.2.10.1. 慧の定義 D 248a2–4, P 284a2–6. (拙稿 [2015c] 93–95, 拙稿 [2017b])	—————— —————— —————— ——
3.4.2.10.2. 人無我の論証 D 248a5–249b3, P 284a6–286a3.	
3.4.2.10.3. 法無我の論証	
3.4.2.10.3.1. 法無我の定義	

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
D 249b3-6, P 286a3-7.（拙稿［2015c］95-96）	――――
3.4.2.10.3.2. 無為法の実体性の否定	――――
D 249b6-7, P 286a7-8.（拙稿［2015c］96）	――――
3.4.2.10.3.3. 四大種と大種所造の実体性の否定 D 249b7-250b2, P 286a8-287a5. Cf. MMA: 13.9-10.（拙稿［2015c］97-100）	――――
3.4.2.10.3.4. 極微の実体性の否定 D 250b2-251a1, P 287a5-b6. Cf. MMA: 13.11-14.4.（拙稿［2015c］100-102）	――――
3.4.2.10.3.5. 心と心所法の実体性の否定 D 251a1-3, P 287b6-288a1. Cf. MMA: 14.4-8.（拙稿［2015c］95-103）	――――
3.4.2.10.4. 無常性を認めるも事物の存在を主張する異説（唯識説）	――――
3.4.2.10.4.1. 異説の内容 D 251a3-6, P 288a1-4.（拙稿［2016c］84-85）	――――
3.4.2.10.4.2. 異説の教証 D 251a6-b3, P 288a4-b3.（拙稿［2016c］85-87）	――――
3.4.2.10.4.3. 異説の理証 D 251b3-4, P 288b3-4.（拙稿［2016c］87-88）	――――
3.4.2.10.5. 異説に対する論駁 D 251b4-252a5, P 288b4-289a7.	――――
3.4.2.10.6. 経典引用による論駁の敷衍 D 252a5-253b7, P 289a7-291a6.	――――
3.4.2.10.7. 無我の解説の総括 D 253b7-254a5, P 291a6-b4.	――――
3.4.2.11. 尋	6.2.11. 尋[1)]

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
D 254a5-b5, P 291b4-292a5. Cf. MMA: 22.15-16.（Lindtner［1979］121.11-122.7, 宮崎ほか［2017］210-213）	D 306b3, P 398a2-3; T 982c24-25.（櫻部［1997］204.26-27, Dhammajoti［2008］83.19-24, 221.24-28, Velthem［1977］16.16-21）
3.4.2.12. 伺	6.2.12. 伺[1)]
D 254b5-255a1, P 292a5-b1. Cf. MMA: 22.16-17.（Lindtner［1979］122.8-20, 宮崎ほか［2017］214-216）	D 306b3-4, P 398a3-4; T 982c25-27.（櫻部［1997］204.28-205.1, Dhammajoti［2008］83.25-28, 221.29-31, Velthem［1977］16.22-25）
3.4.2.13. 放逸	6.2.13. 放逸[1)]
D 255a1, P 292b1. Cf. MMA: 22.19.（Lindtner［1979］122.21-23, 宮崎ほか［2017］154-156）	D 306b4, P 398a4; T 982b22-24.（櫻部［1997］205.2-3, Dhammajoti［2008］85.18-20, 221.32-34, Velthem［1977］18.28-19.2）
3.4.2.14. 不放逸	6.2.14. 不放逸[1)]
D 255a1-b1, P 292b1-293a2. Cf. MMA: 22.19-23.1.（Lindtner［1979］122.24-123.20, 宮崎ほか［2017］146-149）	D 306b4, P 398a4-5; T 982b10-11.（櫻部［1997］205.4-5, Dhammajoti［2008］84.21-22, 222.1-3, Velthem［1977］17.26-29）
3.4.2.15. 厭	6.2.15. 厭[1)]
D 255b1-2, P 293a2-3. Cf. MMA: 23.3-4.（Lindtner［1979］123.21-24）	D 306b4-5, P 398a5-6; T 982b18-20.（櫻部［1997］205.6-7, Dhammajoti［2008］85.7-12, 222.4-9, Velthem［1977］18.17-22）
3.4.2.16. 欣	6.2.16. 欣[1)]
D 255b2, P 293a3-4. Cf. MMA: 23.6.（Lindtner［1979］123.25-26）	D 306b5-6, P 398a6-7; T 982b15-17.（櫻部［1997］205.12-15, Dhammajoti［2008］85.1-6, 222.10-14, Velthem［1977］18.10-16）
3.4.2.17. 軽安，不軽安	6.2.17. 軽安[1)]
D 255b2-4, P 293a4-6. Cf. MMA: 23.8-9.（Lindtner［1979］123.27-33, 拙稿［2016b］28-29, 宮崎ほか［2017］143-145）	D 306b6, P 398a7; T 982b11-12.（櫻部［1997］205.16, Dhammajoti［2008］84.24-25, 222.15-16, Velthem［1977］17.30-32）
3.4.2.18. 害	――――――

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
D 255b4, P 293a6-7. Cf. MMA: 23.11.（Lindtner［1979］124.1-3, 拙稿［2016b］28-29, 宮崎ほか［2017］188-191）	――――――――
3.4.2.19. 不害	――――――――
D 255b4-5, P 293a7. Cf. MMA: 23.12.（Lindtner［1979］124.4-5, 宮崎ほか［2017］140-142）	――――――――
3.4.2.20. 慚	――――――――
D 255b5-6, P 293a7-b1. Cf. MMA: 23.14-15.（Lindtner［1979］124.6-12, 宮崎ほか［2017］126-128）	――――――――
3.4.2.21. 愧	6.2.18. 不害[1)]
D 255b6-7, P 293b1-2. Cf. MMA: 23.15.（Lindtner［1979］124.13-15, 宮崎ほか［2017］129-131）	D 306b6-7, P 398a7-8; T 982b12-13.（櫻部［1997］205.17-18, Dhammajoti［2008］84.26-28, 222.17-20, Velthem［1977］18.1-4）
3.4.2.22. 捨	6.2.19. 慚[1)]
D 255b7-256a2, P 293b2-5. Cf. MMA: 23.17-24.1.（Lindtner［1979］124.16-23, 宮崎ほか［2017］122-125）	D 306b7-307a1, P 398a8-b1; T 982b6-8.（櫻部［1997］205.19-21, Dhammajoti［2008］84.12-16, 222.21-26, Velthem［1977］17.15-20）
3.4.2.23. 解脱	6.2.20. 愧[1)]
D 256a2-3, P 293b5-6. Cf. MMA: 24.3-7.（Lindtner［1979］124.24-27, 拙稿［2016b］29-30）	D 307a1, P 398b1-2; T 982b8-10.（櫻部［1997］205.22-24, Dhammajoti［2008］84.17-20, 222.27-30, Velthem［1977］17.21-25）
3.4.2.24. 善根	6.2.21. 捨[1)]
D 256a3-5, P 293b6-294a1. Cf. MMA: 24.9-13.（Lindtner［1979］124.28-125.9, 宮崎ほか［2017］132-139）	D 307a1-2, P 398b2-4; T 982b13-15.（櫻部［1997］205.25-27, Dhammajoti［2008］84.29-33, 222.31-35, Velthem［1977］18.5-9）
3.4.2.25. 不善根	――――――――
D 256a5-7, P 294a2-4. Cf. MMA: 24.15-	――――――――
	――――――――
	――――――――
	6.2.22. 善根
	D 307a2-5, P 398b4-7; T 982b25-c1.（櫻部［1997］206.1-8, Dhammajoti［2008］85.24-35, 223.4-16, Velthem［1977］19.3-15）
	6.2.23. 不善根
	D 307a5-7, P 398b7-399a3; T 982c1-8.

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
18.（Lindtner［1979］125.10-17）	（櫻部［1997］206.12-19, Dhammajoti［2008］86.1-15, 223.17-30, Velthem［1977］19.16-31）
3.4.2.26. 無記根 D 256a7-b4, P 294a4-b1. Cf. MMA: 25.2-13.（Lindtner［1979］125.18-34）	6.2.24. 無記根 D 307a7-b4, P 399a3-b1; T 982c8-20.（櫻部［1997］206.22-207.7, Dhammajoti［2008］86.16-87.3, 223.31-224.13, Velthem［1977］20.1-21.13）
3.4.2.27. 結（Lindtner［1979］126.1-130.15）	6.2.25. 結（櫻部［1997］207.18-209.27, Dhammajoti［2008］87.4-90.9, 224.14-227.27, Velthem［1977］21.14-27.10）
3.4.2.27.1. 結の総説 D 256b4-5, P 294b1-3. Cf. MMA: 25.15-16.	6.2.25.1. 結の総説 D 307b4, P 399b1-2; T 982c21-22.
3.4.2.27.2. 愛結 D 256b5-6, P 294b3-4. Cf. MMA: 25.17.	6.2.25.2. 愛結 D 307b4-5, P 399b2-3; T 982c22-23.
3.4.2.27.3. 恚結 D 256b6-7, P 294b4. Cf. MMA: 25.18.（宮崎ほか［2017］219-221）	6.2.25.3. 恚結 D 307b5-6, P 399b3-4; T 982c24-26.
3.4.2.27.4. 慢結	6.2.25.4. 慢結
3.4.2.27.4.1. 慢結の総説 D 256b7-257a2, P 294b4-8. Cf. MMA: 25.19-21.	6.2.25.4.1. 慢結の総説 D 307b6-7, P 399b4-6; T 982c26-29.
3.4.2.27.4.2. 慢 D 257a2-5, P 294b8-295a3. Cf. MMA: 25.22-26.1.（宮崎ほか［2017］222-227）	6.2.25.4.2. 慢 D 307b7-308a1, P 399b6-7; T 982a29-983a2.
3.4.2.27.4.3. 過慢 D 257a5-6, P 295a3-4. Cf. MMA: 26.2.	6.2.25.4.3. 過慢 D 308a1-2, P 399b7-8; T 983a2-3.
3.4.2.27.4.4. 慢過慢 D 257a6-7, P 295a4-6. Cf. MMA: 26.3.	6.2.25.4.4. 慢過慢 D 308a2, P 399b8; T 983a3-4.
3.4.2.27.4.5. 我慢 D 257a7-b3, P 295a6-b2. Cf. MMA: 26.4-9.	6.2.25.4.5. 我慢 D 308a2, P 399b8-400a1; T 983a4-5.
3.4.2.27.4.6. 増上慢	6.2.25.4.6. 増上慢

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
D 257b3-4, P 295b2-4. Cf. MMA: 26. 10-11.	D 308a2-3, P 400a1; T 983a5-7.
3.4.2.27.4.7. 邪慢 D 257b4-5, P 295b4-5. Cf. MMA: 26. 12-13.	→「6.2.25.4.8. 邪慢」
3.4.2.27.4.8. 卑慢 D 257b5-6, P 295b5-6. Cf. MMA: 26. 14-15.	6.2.25.4.7. 卑慢 D 308a3, P 400a2; T 983a7-8.
→「3.4.2.27.4.7. 邪慢」	6.2.25.4.8. 邪慢 D 308a3-4, P 400a2-3; T 983a8-10.
3.4.2.27.5. 無明結 D 257b6-7, P 295b6-8. Cf. MMA: 26. 16-19.（宮崎ほか［2017］150-153）	6.2.25.5. 無明結 D 308a4-5, P 400a3-4; T 983a10-13.
3.4.2.27.6. 見結	6.2.25.6. 見結
3.4.2.27.6.1. 見結の総説 D 257b7-258a1, P 295b8-296a1. Cf. MMA: 26.22.	6.2.25.6.1. 見結の総説 D 308a5, P 400a4-5; T 983a13-14.
3.4.2.27.6.2. 有身見 D 258a1-6, P 296a1-7. Cf. MMA: 26.23-27.7.	6.2.25.6.2. 有身見 D 308a5-6, P 400a5-6; T 983a14-16.
3.4.2.27.6.3. 辺執見 D 258a6-b1, P 296a7-b1. Cf. MMA: 27. 8-10.	6.2.25.6.3. 辺執見 D 308a6-7, P 400a6-7; T 983a16-19.
3.4.2.27.6.4. 邪見 D 258b1-2, P 296b1-3. Cf. MMA: 27. 11-12.	6.2.25.6.4. 邪見 D 308a7-b1, P 400a7-8; T 983a19-21.
3.4.2.27.7. 取結	6.2.25.7. 取結
3.4.2.27.7.1. 取結の総説 D 258b2, P 296b3-4. Cf. MMA: 27.13.	6.2.25.7.1. 取結の総説 D 308b1, P 400a8-b1; T 983a21.
3.4.2.27.7.2. 見取 D 258b2-5, P 296b4-7. Cf. MMA: 27. 14-15.	6.2.25.7.2. 見取 D 308b2, P 400b1-2; T 983a21-23.
3.4.2.27.7.3. 戒禁取 D 258b5-7, P 296b7-297a2. Cf. MMA: 27.16-18.	6.2.25.7.3. 戒禁取 D 308b2-4, P 400b2-4; T 983a23-b1.

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
3.4.2.27.8. 疑結 D 258b7–259a1, P 297a2–3. Cf. MMA: 26.20–21.（宮崎ほか［2017］228–231）	6.2.25.8. 疑結 D 308b4–5, P 400b4–5; T 983b1–4.
3.4.2.27.9. 嫉結 D 259a1–2, P 297a3–4. Cf. MMA: 27.19.（宮崎ほか［2017］181–184）	6.2.25.9. 嫉結 D 308b5–6, P 400b6–7; T 983b4–7.
3.4.2.27.10. 慳結 D 259a2–3, P 297a4–5. Cf. MMA: 27.20.（宮崎ほか［2017］178–180）	6.2.25.10. 慳結 D 308b6–7, P 400b7; T 983b7–8.
——————— ——————— ———————	6.2.25.11. 結の語義 D 308b7–309a1, P 400b7–401a1; T 983b8–11.
3.4.2.28. 縛 D 259a3–4, P 297a5–7. Cf. MMA: 27.22–28.1.（Lindtner［1979］130.16–20）	6.2.26. 縛（櫻部［1997］210.21–25, Dhammajoti［2008］90.10–18, 227.28–35, Velthem［1977］27.11–20）D 309a1–2, P 401a1–3; T 983b11–14.
3.4.2.29. 随眠（Lindtner［1979］130.20–135.6）	6.2.27. 随眠（櫻部［1997］210.26–213.24, Dhammajoti［2008］90.19–95.3, 228.1–232.17, Velthem［1977］27.21–33.14）
3.4.2.29.1. 随眠の総説 D 259a4–6, P 297a7–b1. Cf. MMA: 28.4–7. 貪随眠ないし疑随眠については，随眠の総説であげられるが，各随眠の具体的な定義なし．	6.2.27.1. 随眠の総説 D 309a2–4, P 401a3–4; T 983b15–18. 6.2.27.2. 貪随眠 D 309a4–5, P 401a4–5; T 983b18–20.
——————— ——————— ——————— ——————— ——————— ——————— ——————— ——————— ——————— ———————	6.2.27.3. 恚随眠 D 309a5, P 401a6; T 983b20–21. 6.2.27.4. 有貪随眠 D 309a5–6, P 401a6–8; T 983b21–23. 6.2.27.5. 慢随眠 D 309a6–7, P 401a8; T 983b23–24. 6.2.27.6. 無明随眠 D 309a7, P 401a8–b1; T 983b24. 6.2.27.7. 見随眠 D 309a7–b3, P 401b1–4; T 983b24–28.

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
――――――――	6.2.27.8. 疑随眠 D 309b3-4, P 401b4-5; T 983b28-29.
――――――――	6.2.27.9. 界，形相，部による区別 D 309b4-7, P 401b5-402a1; T 983b29-c5.
――――――――	
――――――――	
――――――――	
3.4.2.29.2. 三界	**→「6.2.37.2. 三界」**
3.4.2.29.2.1. 三界の総説 **D 259a6-7, P 297b2.**	
3.4.2.29.2.2. 欲界 **D 259a7-b2, P 297b2-5.**	
3.4.2.29.2.3. 色界 **D 259b2-5, P 297b5-8.**	
3.4.2.29.2.4. 無色界 **D 259b5-6, P 297b8-298a2.**	
3.4.2.29.3. 五部 D 259b6-260a2, P 298a2-5.	――――――――
3.4.2.29.4. 九十八随眠	――――――――
3.4.2.29.4.1. 見苦所断の二十八随眠 D 260a2-5, P 298a5-b1.	→「6.2.27.11. 九十八随眠」
3.4.2.29.4.2. 見集所断の十九随眠 D 260a5-b1, P 298b1-5.	
3.4.2.29.4.3. 見滅所断の十九随眠 D 260b1-3, P 298b5-7.	
3.4.2.29.4.4. 見道所断の二十二随眠 D 260b3-5, P 298b7-299a2.	
3.4.2.29.4.5. 修所断の十随眠 D 260b5-261a1, P 299a2-5.	
3.4.2.29.5. 四向四果 **D 261a1-5, P 299a5-b2.**	**→「6.2.40. 四向四果」**
3.4.2.29.6. 随眠の語義解釈 D 261a5-6, P 299b3. Cf. MMA: 28.9-11. →「3.4.2.29.4. 九十八随眠」	6.2.27.10. 随眠の語義解釈 D 309b7-310a1, P 402a1-3; T 983c5-11. 6.2.27.11. 九十八随眠 6.2.27.11.1. 九十八随眠の総説 D 310a1-2, P 402a3-4; T 983c11-12. 6.2.27.11.2. 欲界繋の三十六随眠

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
	D 310a2-5, P 402a4-8; T 983c12-18.
	6.2.27.11.3. 色界繋の三十一随眠 D 310a5, P 402a8; T 983c18-19.
	6.2.27.11.4. 無色界繋の三十一随眠 D 310a5-6, P 402a8; T 983c19-20.
—————— ——————	6.2.27.11.5. 九十八随眠の諸門分別 D 310a6-b3, P 402a8-b6; T 983c20-29.
3.4.2.29.7. 随眠が生じる順番 D 261a6-b4, P 299b4-300a2. Cf. MMA: 28.13-29.2.	6.2.27.12. 随眠が生じる順番 D 310b3-311a1, P 402b6-403a4; T 983c29-984a14.
3.4.2.29.8. 随眠が生じる原因 D 261b4, P 300a2-3. Cf. MMA: 29.4-7.	6.2.27.13. 随眠が生じる原因 D 311a1-2, P 403a4-6; T 984a14-18.
3.4.2.30. 随煩悩（Lindtner［1979］135.7-136.10）	6.2.28. 随煩悩（櫻部［1997］214.10-26, Dhammajoti［2008］95.4-96.9, 232.18-233.23, Velthem［1977］33.15-35.13）
3.4.2.30.1. 随煩悩の総説 D 261b5-7, P 300a3-6. Cf. MMA: 29.9-10.	6.2.28.1. 随煩悩の総説 D 311a2-3, P 403a6-8; T 984a19-22.
3.4.2.30.2. 誑 D 261b7-262a1, P 300a6-7. Cf. MMA: 29.11-13.（宮崎ほか［2017］192-194）	6.2.28.2. 誑 D 311a3, P 403a8; T 984a22.
3.4.2.30.3. 憍 D 262a1-2, P 300a7-8. Cf. MMA: 29.14.（宮崎ほか［2017］198-200）	6.2.28.3. 憍 D 311a3-4, P 403a8-b1; T 984a22-24.
3.4.2.30.4. 害 D 262a2, P 300a8. Cf. MMA: 29.15.（拙稿［2016b］28-29, 宮崎ほか［2017］188-191）	6.2.28.4. 害 D 311a4-5, P 403b1; T 984a24-25.
3.4.2.30.5. 悩 D 262a2-3, P 300a8-b1. Cf. MMA: 29.16.（宮崎ほか［2017］185-187）	6.2.28.5. 悩 D 311a5, P 403b1-2; T 984a25-26.
3.4.2.30.6. 恨 D 262a3-4, P 300b1-2. Cf. MMA: 29.17.（宮崎ほか［2017］201-203）	6.2.28.6. 恨 D 311a5, P 403b2; T 984a26-27.

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
3.4.2.30.7. 諂 D 262a4, P 300b2-4. Cf. MMA: 29.18-30.1.（宮崎ほか［2017］195-197）	6.2.28.7. 諂 D 311a5-6, P 403b2-3; T 984a27.
3.4.2.30.8. 六随煩悩と随眠の関係 D 262a5, P 300b4-5. Cf. MMA: 30.2-3.	6.2.28.8. 六随煩悩と随眠の関係 D 311a6-7, P 403b3-5; T 984a27-b5.
3.4.2.31. 纏（Lindtner［1979］136.11-137.26）	6.2.29. 纏（櫻部［1997］215.23-216.18, Dhammajoti［2008］96.10-97.15, 233.24-234.34, Velthem［1977］35.14-37.2）
3.4.2.31.1. 纏の総説 D 262a5-6, P 300b5-6. Cf. MMA: 30.5-6.	6.2.29.1. 纏の総説 D 311a7-b1, P 403b5-6; T 984b6-7.
3.4.2.31.2. 惛沈 D 262a6-7, P 300b6. Cf. MMA: 30.7-8.（宮崎ほか［2017］161-163）	6.2.29.2. 惛沈 D 311b1, P 403b6; T 984b7-8.
3.4.2.31.3. 睡眠 D 262a7, P 300b6-7. Cf. MMA: 30.9-12.（宮崎ほか［2017］207-209）	6.2.29.3. 睡眠 D 311b1-2, P 403b6-7; T 984b8-9.
3.4.2.31.4. 掉挙 D 262a7-b1, P 300b7-8.（宮崎ほか［2017］164-165）	6.2.29.4. 掉挙 D 311b2, P 403b7; T 984b9-10.
3.4.2.31.5. 悪作 D 262b1-2, P 300b8-301a1.（宮崎ほか［2017］204-206）	6.2.29.5. 悪作 D 311b2-3, P 403b7-404a1; T 984b10-14.
3.4.2.31.6. 慳，嫉 D 262b2, P 301a1.	6.2.29.6. 慳，嫉 D 311b3-4, P 404a1; T 984b14.
3.4.2.31.7. 無慚 D 262b2-3, P 301a1-2. Cf. MMA: 30.13-14.（宮崎ほか［2017］166-168）	6.2.29.7. 無慚 D 311b4, P 404a1-2; T 984b14-15.
3.4.2.31.8. 無愧 D 262b3, P 301a2-3. Cf. MMA: 30.14.（宮崎ほか［2017］169-171）	6.2.29.8. 無愧 D 311b4, P 404a2; T 984b16-17.
3.4.2.31.9. 忿 D 262b3-5, P 301a3-5. Cf. MMA: 30.15-16.（宮崎ほか［2017］172-174）	6.2.29.9. 忿 D 311b4-5, P 404a2-3; T 984b17-18.

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
3.4.2.31.10. 覆 D 262b5-6, P 301a5-6. Cf. MMA: 30.17.（宮崎ほか［2017］175-177）	6.2.29.10. 覆 D 311b5, P 404a3; T 984b18.
3.4.2.31.11. 纏の語義解釈 D 262b6-7, P 301a6-7. Cf. MMA: 30.18-19.	6.2.29.11. 纏の語義解釈 D 311b5, P 404a3-4; T 984b18-19.
3.4.2.31.12. 十纏と随眠の関係 D 262b7-263a1, P 301a7-8. Cf. MMA: 31.1-4.	6.2.29.12. 十纏と随眠の関係 D 311b5-6, P 404a4-5; T 984b19-21.
――――――	6.2.29.13. 十纏と随煩悩の関係 D 311b6-7, P 404a5; 漢訳に相当する解説なし
――――――	6.2.30. 心所を分類することの難しさ D 311b7-312a1, P 404a6-8; T 984b21-26.（櫻部［1997］216.28-217.5, Dhammajoti［2008］97.16-27, 235.1-11, Velthem［1977］37.3-15）
3.4.2.32. 漏 D 263a1-4, P 301a8-b5. Cf. MMA: 30.6-12.（Lindtner［1979］137.27-138.9）	6.2.31. 漏 D 312a1-5, P 404a8-b5; T 984b27-c7.（櫻部［1997］217.6-17, Dhammajoti［2008］97.28-98.21, 235.12-34, Velthem［1977］37.16-38.27）
3.4.2.33. 暴流 D 263a4-6, P 301b5-7. Cf. MMA: 31.14-16.（Lindtner［1979］138.9-16）	6.2.32. 暴流 D 312a5-b1, P 404b5-8; T 984c8-13.（櫻部［1997］218.3-8, Dhammajoti［2008］98.22-99.2, 235.35-14, Velthem［1977］38.28-39.8）
3.4.2.34. 軛 D 263a6, P 301b7. Cf. MMA: 32.1-2.（Lindtner［1979］138.17）	6.2.33. 軛 D 312b1-2, P 404b8-405a1; T 984c13-15.（櫻部［1997］218.18-20, Dhammajoti［2008］99.3-7, 236.15-20, Velthem［1977］39.9-15）
3.4.2.35. 取 D 263a6-b4, P 301b7-302a5. Cf. MMA:	6.2.34. 取 D 312b2-7, P 405a1-b1; T 984c20-

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
32.4-11.（Lindtner［1979］138.18-139.6）	985a8.（櫻部［1997］218.22-219.12, Dhammajoti［2008］99.9-100.7, 236.22-237.25, Velthem［1977］40.2-41.4）
3.4.2.36. 漏，暴流，軛，取の語義解釈 D 263b4-6, P 302a5-8. Cf. MMA: 31.10-12, 31.15-16, 32.1-2, 32.10-11（Lindtner［1979］139.7-15）	漏ないし取の語義解釈については，上述の各法の解説の末尾を参照.
3.4.2.37. 繫 D 263b6-264a2, P 302a8-b3. Cf. MMA: 32.13-15.（Lindtner［1979］139.16-26）	6.2.35. 繫 D 312b7-313a3, P 405b1-4; T 985a8-12.（櫻部［1997］219.17-25, Dhammajoti［2008］100.8-19, 237.26-37, Velthem［1977］41.5-19）
3.4.2.38. 蓋 D 264a2-3, P 302b3-4. Cf. MMA: 32.17-33.13.（Lindtner［1979］139.27-31）	6.2.36. 蓋 D 313a3-6, P 405b4-7; T 985a13-18.（櫻部［1997］219.26-220.9, Dhammajoti［2008］100.20-32, 238.1-14, Velthem［1977］41.20-42.5）
——————— ——————— ——————— ——————— ——————— ——————— →「**3.4.2.29.2. 三界**」 ——————— ———	6.2.37. 界，趣，生，地（櫻部［1997］220.18-221.12, Dhammajoti［2008］100.33-102.12, 238.15-239.28, Velthem［1977］42.6-44.31） 6.2.37.1. 界趣生地の総説 D 313a6, P 405b7-8; T 985a19-20. **6.2.37.2. 三界** **6.2.37.2.1. 三界の総説** **D 313a6-7, P 405b8-406a1; T 985a20.** **6.2.37.2.2. 欲界** **D 313a7-b2, P 406a1-4; T 985a20-26.** **6.2.37.2.3. 色界** **D 313b2-4, P 406a4-6; T 985a27-b4.** **6.2.37.2.4. 無色界** **D 313b4-5, P 406a7-8; T 985b5-7.** **6.2.37.3. 五趣** **D 313b5-6, P 406a8-b1; T 985b7-8.**

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
――――――	**6.2.37.4. 四生**
――――――	**D 313b6, P 406b1; T 985b8.**
――――――	**6.2.37.5. 十一地**
――――――	**D 313b6-314a1, P 406b1-3; T 985b9-11.**
――――――	
3.4.2.39. 智 Cf. MMA: 33.15-16.（Lindtner［1979］139.32-141.25）	6.2.38. 智（櫻部［1997］221.18-223.16, Dhammajoti［2008］102.13-105.24, 239.29-242.36, Velthem［1977］45.1-50.2）
3.4.2.39.1. 智の総説	6.2.38.1. 智の総説
D 264a3-4, P 302b5-6.	D 314a1-2, P 406b3-5; T 985b12-13.
3.4.2.39.2. 法智	6.2.38.2. 法智
D 264a4-6, P 302b6-8.	D 314a2-4, P 406b5-7; T 985b13-16.
3.4.2.39.3. 類智	6.2.38.3. 類智
D 264a6-b1, P 302b8-303a3.	D 314a4-5, P 406b7-8; T 985b16-18.
3.4.2.39.4. 他心智	6.2.38.4. 他心智[2)]
D 264b1-3, P 303a3-5.	D 314a5-b1, P 407a1-5; T 985b27-c5.
3.4.2.39.5. 世俗智	6.2.38.5. 世俗智[2)]
D 264b3, P 303a5.	D 314b1-5, P 407a5-b2; T 985b18-27.
3.4.2.39.6. 苦智	6.2.38.6. 苦智
D 264b3-4, P 303a5-7.	D 314b5-6, P 407b2; T 985c5-7.
3.4.2.39.7. 集智	6.2.38.7. 集智
D 264b4-5, P 303a7-8.	D 314b6, P 407b3; T 985c7-8.
3.4.2.39.8. 滅智	6.2.38.8. 滅智
D 264b5-6, P 303a8-b1.	D 314b6-7, P 407b4; T 985c8-9.
3.4.2.39.9. 道智	6.2.38.9. 道智
D 264b6-7, P 303b1-2.	D 314b7-315a1, P 407b4-5; T 985c9-10.
3.4.2.39.10. 尽智	6.2.38.10. 尽智
D 264b7-265a1, P 303b2-3.	D 315a1, P 407b5-6; T 985c10-12.
3.4.2.39.11. 無生智	6.2.38.11. 無生智
D 265a1-3, P 303b3-6.	D 315a1-2, P 407b6-7; T 985c12-14.
――――――	6.2.38.12. 十智の諸門分別
――――――	D 315a2-7, P 407b7-408a5; T 985c14-23.
――――――	
3.4.2.40. 忍	6.2.39. 忍（櫻部［1997］224.4-18,

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
D 265a3-5, P 303b6-8. Cf. MMA: 33. 18-19.（Lindtner［1979］141.26-142.3）	Dhammajoti［2008］105.25-106.29, 243. 1-34, Velthem［1977］50.3-51.16）
	6.2.39.1. 忍の総説 D 315a7-b2, P 408a6-8; T 985c24-26.
——————— ——————— ———————	6.2.39.2. 忍と智の関係 D 315b2-6, P 408a8-b6; T 985c26-986a7.
→「3.4.2.29.5. 四向四果」	**6.2.40. 四向四果**（櫻部［1997］224. 19-225.19, Dhammajoti［2008］106. 30-108.7, 244.1-245.24, Velthem［1977］51.16-53.18）
	6.2.40.1. 四果 **D 315b6-316a5, P 408b6-409a6; T 986a7-18.**
	6.2.40.2. 四向 **D 316a5-6, P 409a6; T 986a18-19.**
	6.2.40.3. 八種のプドガラ **D 316a6-7, P 409a6-b1; T 986a19-20.**
——————— ———————	6.2.40.4. 六種のプドガラ D 316a7-b3, P 409b1-4; T 986a20-27.
3.4.3. 心不相応行	6.3. 心不相応行
3.4.3.1. 得，非得 D 265a5-b1, P 303b8-304a4. Cf. MMA: 34.7-11.（Lindtner［1979］142.4-19, 宮崎ほか［2017］232-238）	6.3.1. 得，非得（櫻部［1997］225.23-228.9, Dhammajoti［2008］108.18-112. 12, 245.25-248.32, Velthem［1977］53.19-58.31）
	6.3.1.1. 得の定義 D 316b3-5, P 409b4-6; T 986a28-b2.
（拙稿［2016b］31-34） ——————— ——————— ——————— ——————— ——————— ——————— ———————	6.3.1.2. 得の実在論証 D 316b5-317a1, P 409b6-410a3; T 986b2-12. 6.3.1.3. 得の二つの形態 D 317a1, P 410a3; T 986b12-13. 6.3.1.4. 非得の定義 D 317a1-2, P 410a3-4; T 986b13-14. 6.3.1.5. 諸法における得と非得の存

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
――――――	在と非存在 D 317a2-3, P 410a4-5; T 986b14-18.
――――――	6.3.1.6. 得と法の先後関係 D 317a3-7, P 410a5-b2; T 986b18-28.
――――――	6.3.1.7. 得の諸門分別 D 317a7-b6, P 410b2-411a3; T 986b28-c16.
――――――	6.3.1.8. 非得の諸門分別 D 317b6-318a1, P 411a3-5; T 986c16-24.
3.4.3.2. 無想定 D 265b1-2, P 304a4-5. Cf. MMA: 34.13-14.（Lindtner［1979］142.20-23, 宮崎ほか［2017］246-249）	6.3.2. 無想定 D 318a1-4, P 411a5-b1; T 986c25-987a2.（櫻部［1997］228.19-229.2, Dhammajoti［2008］112.13-30, 248.33-249.12, Velthem［1977］58.32-59.16）
3.4.3.3. 滅尽定 D 265b2-3, P 304a5-6. Cf. MMA: 34.15-17.（Lindtner［1979］142.24-27, 宮崎ほか［2017］250-253）	6.3.3. 滅尽定 D 318a4-b1, P 411b1-6; T 987a2-13.（櫻部［1997］229.3-18, Dhammajoti［2008］112.31-113.22, 249.13-38, Velthem［1977］59.17-60.17）
3.4.3.4. 無想 D 265b3, P 304a6-7. Cf. MMA: 34.17-35.1.（Lindtner［1979］142.28-30, 宮崎ほか［2017］242-245）	6.3.4. 無想 D 318b1-4, P 411b6-412a2; T 987a13-21.（櫻部［1997］229.19-230.2, Dhammajoti［2008］113.23-114.6, 250.1-21, Velthem［1977］60.18-61.10）
3.4.3.5. 命根 D 265b3-4, P 304a7. Cf. MMA: 35.3.（Lindtner［1979］143.1, 宮崎ほか［2017］254-256）	6.3.5. 命根 D 318b5-319a1, P 412a2-6; T 987a22-b4.（櫻部［1997］230.5-17, Dhammajoti［2008］114.7-115.4, 250.22-251.10, Velthem［1977］61.11-63.8）
3.4.3.6. 同分 D 265b4, P 304a7-8. Cf. MMA: 35.3-4.（Lindtner［1979］143.2-4, 宮崎ほか［2017］239-241）	6.3.6. 同分 D 319a1-6, P 412a6-b4; T 987b4-17.（櫻部［1997］230.23-231.11, Dhammajoti［2008］115.5-36, 251.11-252.4, Velthem［1977］63.9-64.32）

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
3.4.3.7. 依得，事得，処得 D 265b4-5, P 304a8-b1.（Lindtner［1979］143.5-8, 拙稿［2017b］）	――――――― ――――――― ――――――― 6.3.7. 四相（櫻部［1997］231.18-233.11, Dhammajoti［2008］116.1-118.21, 252.5-253.35, Velthem［1977］65.1-68.4, 武田［2013］）
3.4.3.8. 四相（Lindtner［1979］143.9-14, 宮崎ほか［2017］257-268）	6.3.7.1. 四相の定義
3.4.3.8.1. 生 D 265b5, P 304b1. Cf. MMA: 35.4.	6.3.7.1.1. 生 D 319a6-7, P 412b4-6; T 987b18-23.
3.4.3.8.2. 異 D 265b5, P 304b1. Cf. MMA: 35.4-5.	→「6.3.7.1.3. 異」
3.4.3.8.3. 住 D 265b5-6, P 304b1-2. Cf. MMA: 35.5. →「3.4.3.8.2. 異」	6.3.7.1.2. 住 D 319a7-b1, P 412b6-7; T 987b23-27.
	6.3.7.1.3. 異 D 319b1-2, P 412b7-8; T 987b27-c2.
3.4.3.8.4. 無常性 D 265b6, P 304b2. Cf. MMA: 35.5-6.	6.3.7.1.4. 無常性 D 319b2-3, P 412b7-413a1; T 987c2-6.
――――――― ――――――― ――――――― ――――――― ――――――― ――――――― ―――――――	6.3.7.2. 三相と四相 D 319b3-5, P 413a2-4; T 987c6-10. 6.3.7.3. 相と法が異なること D 319b5-7, P 413a4-6; T 987c10-13. 6.3.7.4. 随相 D 319b7-320a3, P 413a6-b2; T 987c13-23.
3.4.3.9. 名身，句身，文身 D 265b6-7, P 304b2-3. Cf. MMA: 35.8-9.（Lindtner［1979］143.15-19, 宮崎ほか［2017］269-280）	6.3.8. 名身，句身，文身（櫻部［1997］233.12-234.16, Dhammajoti［2008］118.22-119.27, 254.1-255.8, Velthem［1977］68.5-69.30）
	6.3.8.1. 名身，句身，文身の定義 D 320a3-5, P 413b2-5; T 987c23-26.
――――――― ――――――― ――――――― ―――――――	6.3.8.2. 別立ての理由 D 320a5-b1, P 413b5-414a1; T 987c26-988a6. 6.3.8.3. 身の意味

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
――――――	D 320b1-4, P 414a1-3; T 988a6-12.
3.4.3.10. 縁不和合，縁和合 D 265b7, P 304b3-4. Cf. MMA: 35.11.（Lindtner［1979］143.20-24, 拙稿［2017b］）	――――――
3.5. 識蘊（Lindtner［1979］143.25-144.23, 宮崎ほか［2017］56-61）	――――――
3.5.1. 識の定義 D 265b7-266a2, P 304b4-5. Cf. MMA: 37.4-6.	――――――
3.5.2. 識と認識対象の相互依存 D 266a2-4, P 304b5-8. Cf. MMA: 37.6-10.（拙稿［2016a］166-167）	7. 識句義 D 320b4-7, P 414a3-8; T 988a12-20.（櫻部［1997］234.17-27, Dhammajoti［2008］120.1-25, 256.1-20, Velthem［1977］70.1-71.7）
3.5.3. 六識 D 266a4-7, P 304b8-305a4. Cf. MMA: 37.11.	――――――
――――――	――――――
――――――	――――――
――――――	――――――
――――――	――――――
――――――	**8. 六因，五果，四縁**（櫻部［1997］235.3-236.21, Dhammajoti［2008］120.26-123.9, 256.21-258.33, Velthem［1977］71.9-74.16）
――――――	**8.1. 因果縁の総説** **D 320b7-321a1, P 414a8-b1; T 988a21-23.**
――――――	**8.2. 六因**
――――――	**8.2.1. 六因の総説** **D 321a1, P 414b1-2; T 988a23-25.**
――――――	**8.2.2. 相応因** **D 321a1-2, P 414b2-3; T 988a25-27.**
――――――	**8.2.3. 俱有因** **D 321a2-6, P 414b3-8; T 988a27-b5.**
――――――	**8.2.4. 同類因** **D 321a6, P 414b8; T 988b5-6.**
――――――	**8.2.5. 遍行因** **D 321a6-7, P 414b8-415a1; T 988b6-7.**
――――――	**8.2.6. 異熟因**

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
――――	D 321a7, P 415a1-2; T 988b7-8.
――――	**8.2.7. 能作因**
――――	D 321a7-b1, P 415a2; T 988b8-10.
――――	**8.3. 五果**
――――	**8.3.1. 五果の総説**
――――	D 321b1, P 415a2-3; T 988b10-11.
――――	**8.3.2. 士用果**
――――	D 321b2, P 415a3-4; T 988b11-12.
――――	**8.3.3. 等流果**
――――	D 321b2-3, P 415a4-5; T 988b12-14.
――――	**8.3.4. 異熟果**
――――	D 321b3, P 415a5-6; T 988b14-16.
――――	**8.3.5. 増上果**
――――	D 321b3-4, P 415a6-7; T 988b17-19.
――――	**8.3.6. 離繫果**
――――	D 321b4, P 415a7; T 988b19-21.
――――	**8.4. 四縁**
――――	**8.4.1. 四縁の総説**
――――	D 321b4-5, P 415a7-8; T 988b21-22.
――――	**8.4.2. 因縁**
――――	D 321b5, P 415a8; T 988b22.
――――	**8.4.3. 等無間縁**
――――	D 321b5, P 415a8-b1; T 988b22-23.
――――	**8.4.4. 所縁縁**
――――	D 321b5, P 415b1; T 988b23-24.
――――	**8.4.5. 増上縁**
――――	D 321b6, P 415b1; T 988b24.
4. 十二処（Lindtner［1979］144.24-145.8）	――――
4.1. 十二処の総説	――――
D 266a7-b1, P 305a4-5. Cf. MMA: 38.9-10.	――――
4.2. 意処	――――
D 266b1, P 305a5-6. Cf. MMA: 38.12-16.	――――
	――――
	――――
	――――

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
4.3. 法処	――――――
4.3.1. 法処の総説	――――――
D 266b2-3, P 305a6-7. Cf. MMA: 38.18-20.（拙稿［2016c］82-83）	――――――
4.3.2. 無為法	――――――
4.3.2.1. 虚空	9. 虚空句義（櫻部［1997］236.22-237.4, Dhammajoti［2008］124.1-18, 259.1-17, Velthem［1977］74.17-75.12）
D 266b3, P 305a7-8. Cf. MMA: 38.21-39.2.（拙稿［2016c］82-83, 宮崎ほか［2017］281-283） （拙稿［2016b］31-34）	9.1. 虚空の定義 D 321b6, P 415b1; T 988b25-26. 9.2. 虚空の実在論証 D 321b6-322a1, P 415b1-5; T 988b26-c3.
――――――	→「11. 非択滅句義」
――――――	
4.3.2.2. 非択滅 D 266b3-4, P 305a8. Cf. MMA: 39.5-7.（拙稿［2016c］82-83, 宮崎ほか［2017］288-290）	
4.3.2.3. 択滅 D 266b4, P 305a8-b1. Cf. MMA: 39.3-4.（拙稿［2016c］82-83, 宮崎ほか［2017］284-287）	10. 択滅句義（櫻部［1997］237.6-239.11, Dhammajoti［2008］125.1-126.39, 260.1-261.30, Velthem［1977］75.14-77.27） 10.1. 択滅の定義 D 322a1-4, P 415b5-8; T 988c4-9. 10.2. 択滅と所断の対応 D 322a4-6, P 415b8-416a2; T 988c9-13. 10.3. 択滅の種類 D 322a6-b1, P 416a2-4; T 988c13-17. 10.4. 択滅の実在論証 D 322b1-323a2, P 416a4-b6; T 988c17-989a3.（拙稿［2013a］［2013b］）
――――――	
――――――	
――――――	
――――――	
（拙稿［2016b］31-34）	
――――――	
――――――	
→「4.3.2.2. 非択滅」	11. 非択滅句義（櫻部［1997］239.12-22, Dhammajoti［2008］127.1-29, 262.1-21, Velthem［1977］78.1-30） 11.1. 非択滅の定義 D 323a2-4, P 416b6-417a2; T 989a4-8.

『中観五蘊論』	『入阿毘達磨論』
（拙稿［2016b］31-34） ――――――	11.2. 非択滅の実在論証 D 323a4-5, P 417a2-4; T 989a8-13. ―――――― ―――――― ――――――
5. 十八界 D 266b4-5, P 305b1-2. Cf. MMA: 39. 16-19.（Lindtner［1979］145.9-12） 6. 結語と結偈 D 266b5-6, P 305b2-3.（Lindtner［1979］145.13-17, 拙稿［2015c］91）	12. 結語 D 323a5-7, P 417a4-8; T 989a13-18.（櫻部［1997］239.25-240.6, Dhammajoti［2008］128.1-12, 263.1-12, Velthem［1977］79.1-14）

1『入阿毘達磨論』のチベット語訳と漢訳では心相応行の並びが異なる。チベット語訳の作意ないし捨が漢訳では以下の順で説かれる。

欲、作意、勝解、念、定、慧、尋、伺、信、精進、慚、愧、不放逸、軽安、不害、捨、欣、厭、不信、懈怠、放逸

また『入阿毘達磨論』の漢訳では、厭と放逸の間にチベット語訳では説かれない不信と懈怠が説かれる。

2『入阿毘達磨論』のチベット語訳と漢訳では他心智と世俗智が説かれる順が異なる。チベット語訳では、他心智、世俗智の順で説かれるが、漢訳では、世俗智、他心智の順で説かれる。

Summary

Textual Comparison of the *Madhyamakapañcaskandhaka* and the *Abhidharmāvatāra*: Theories Associated with the *Dharma* System

YOKOYAMA Takeshi

Candrakīrti's treatise *Madhyamakapañcaskandhaka* (MPSk), which is preserved only in its Tibetan translation, lays out the Abhidharma categories of the Sarvāstivādas from the perspective of Madhyamaka thought and introduces the theory of non-self to beginners in Buddhism. The MPSk is one of the most significant sources for Madhyamaka understanding of theories of the Sarvāstivādas.

Previous studies have found an influence of Skandhila's *Abhidharmāvatāra* (AA) on the MPSk, citing the nearly identical components of the conditioned forces associated with thought (*cittasaṃprayukta*) in these treatises. To clarify the entirety of the relationship between these treatises, their relationship must be investigated not only in terms of the enumeration of *dharma*s, but also in terms of the contents of the text and in a literal sense.

Here, I investigate the relationship between the MPSk and the AA in the textual contents. Through this investigation, I focus on the theories associated with the system of *dharma*s, such as cosmography, the law of causality, and the theory of the path. Comparing the positions of those treatises on these theories, I demonstrate differences in the texts' characteristics and in the authors' aims.

Project Researcher,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies